

研究プロジェクト 2.「経営者プロジェクト」

このプロジェクトはアントレプレナーシップとイノベーションを中心的な視点に据え、日本および各国の経営者の経営行動を研究対象とするものである。

経営学の研究において、マクロ経済環境とミクロ的な組織内相互作用の結節点となる経営者・企業家活動は重要なものである。マクロ経済環境への適応という点では、経営者にはアントレプレナーシップの発揮が期待される一方で、企業内のミクロ相互作用に対しては、リーダーシップに基づくイノベーションの実現が期待されている。例えば具体的には、組織の外部に対しては経営者には戦略的な経済合理性が必要とされる一方で、組織の内部に対しては社員を鼓舞する人間的な要素も必要とされる。そういった多様な技量を要する経営者とその経営行動に対して、本プロジェクトは多様な観点からアプローチするものである。

プロジェクトでは理論と歴史の両面を重視し、経営史、企業家史、企業統治、経営倫理をディシプリンとしている。さらに近年ではこれに加え、企業の社会的責任（CSR）が問われ、また世界的な規模で持続可能な開発目標（SDGs）への注目が高まっていることから、より広義の社会イノベーションに関してもテーマの対象を広げている。さらに企業活動を通じて社会に有用な目標をかなえる点で、その実現の方策としてのベンチャービジネスやその経営者に関するテーマも範囲に含めている。以上のように、本プロジェクトは、アントレプレナーシップとイノベーションを中心に、企業経営を導く人間の意思決定や考え方・行動に関するトピックを総合的に対象とするものである。

メンバーについては、経営管理研究科教員の島本実（経営史）、田中一弘（企業統治）、李燃（経営組織論）が中心となり、大学院博士課程の遠藤寛士（D3）、ファン・トゥ（D3）を加え、また2018～2019年度にはウェン・ファーガリン（スウェーデン、ブレイキング工科大学専任講師）を外国人研究員として迎えて研究を行ってきた。その成果は、国内外の学術誌や学会報告で発表されている。

これまでに行った研究テーマとしては、京セラ（稲盛和夫研究）、出光興産（出光佐三研究）、ラクスル（松本恭暲研究）、日本交通（川鍋一郎研究）、再生可能エネルギーの導入・普及、グリーン・イノベーション、企業統治、企業統治と経営者の良心に関する研究、住友化学のSDG経営（スウェーデン企業との比較）、ホンダの海外展開（ベトナムでの企業活動）等がある。

●受賞

企業家研究フォーラム賞（論文の部）：遠藤寛士「日本交通の組織変革：川鍋一郎によるサービスマス差別化と組織メンバーの主体性喚起」『企業家研究』第16号。